

# 水と文学 (4)



前東京都水道局理事 小泉 智和

松尾芭蕉の紀行文「おくのほそ道」は、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口をとらえて老いをむかふる物(者)は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。……」の序文で始まります。

芭蕉が、弟子の曾良を連れて、おくのほそ道(東北・北陸)へ漂白の旅に出たのは、元禄2年(1689)3月27日の事でありました。

千住を立ち、草加・日光・黒羽・須賀川・松島・平泉・尾花沢・羽黒山などを巡って日本海に出て、酒田・象潟・出雲崎・高岡・金沢・敦賀を経て、9月、大垣に至る約6ヶ月の太行脚で、芭蕉45歳、曾良40歳の時でした。

## 芭蕉年譜

松尾芭蕉こと松尾金作(後甚七郎)は、正保元年(1644)に伊賀上野で生まれました。父は武家の松尾家出身ですが、別家して農民となっていました。金作には、兄、姉及び三人の妹がおりました。

18歳頃(寛文2年・1662)、縁あって、

伊勢津32万石藤堂高虎の分家である伊賀上野藤堂家5千石の嫡子良忠(俳号蟬吟)の近習となります。もし、良忠が主君となっていれば、芭蕉は武士への道が開け、それなりの役職についたと想定されます。しかし、良忠は24歳で夭逝(ようせい)してしまいます。芭蕉22歳の時です。

\* 芭蕉の最も古い作品(俳号宗房・18歳)は、「春やこし年や行きけん小晦日(こつごもり)」です。

28歳の時、江戸日本橋近くの貸家に住まいますが、江戸に下ったのは、藤堂藩士の姉との恋愛に敗れたからと言われています。

延宝5年～8年(1677～80)、33歳から36歳までの4年間、神田上水改修工事に何らかの形で参画し、改修工事期間中、関口大洗の「龍隠庵(りゅうげあん)」に居住したと伝えられています(俳号・桃青)。その後、深川に居を移しますが、俳号の「芭蕉」を用いたのはこの頃からで、謂れは門人が植えたパショウによります。

貞享元年(1684)、「野ざらし」の旅に出ます。東海道を下って、伊勢・伊賀・大和・吉野・山城・近江・美濃・熱田・

名古屋を回り、木曾を経て、翌年江戸に帰りました。

貞享4年、「笈（おい）の小文」の旅、翌年「更科紀行」の旅、そして元禄2年（1689）「おくのほそ道」の旅に出ます。

元禄7年6月、江戸の寿貞尼（内縁の妻）が没すると、7月盆会のため、芭蕉は伊賀上野に帰り、その足で奈良・大阪の吟席を重ねます。9月、頭痛悪寒、下痢で床に臥します。

10月4日、最後の句は、「旅に病（やん）で夢は枯野をかけ廻る」です。

同月10日、遺書を書き、12日に没しました。50歳で老衰と言われます。遺言によって琵琶湖南の義仲寺に埋葬されました。



おくのほそ道行の芭蕉と曾良・森川許六筆  
（天理大学付属天理図書館蔵）

## 神田上水水番人

芭蕉の記録については、伊賀上野の藤堂良忠が夭逝してから深川芭蕉庵に移り住むまでが、最も不確で、諸説紛々であります。

江戸に下ったのも、失恋説、内縁関係にあった寿貞尼との出奔説、伊賀忍者としての隠密説（「おくのほそ道」は伊達藩の動向を探るための説）等があります。

松尾芭蕉が水道工事に関わったことは事実のようで、次の記録が残っています。

### 「延宝八年（1680）神田上水惣払 町触」 覚

一、明後十三日 神田上水道水上惣払  
有之候間 致相対候町々ハ 桃青  
方へ急度可被申渡候 桃青相対無  
之町々之月行持（事） 明十二日  
早天ニ 杭木、かけや水上迄致持  
参 丁場請取可被申候 勿論十三  
日中ハ 水きれ申候間 水道取候  
町々ハ左様ニ相心得 可被相触候  
若雨降候ハ、惣払相延候間 左  
様ニ相心得可被申候 以上

六月十一日 町年寄 三人

「覚」の大意は、水上の堰口とその付近に堆積した土砂の惣払＝掻い堀作業の実施を伝えるものです。町触中の「桃青」は、芭蕉が深川に移るまでの俳号です。水番人になった経過については、

- ・門人・小沢卜尺が町年寄に頼んで、水番人の仕事を回してもらった
- ・神田上水改修工事の奉行・中坊家に仕えて工事現場の見回りをした（遠縁の中坊家・家老浜島氏を頼って）
- ・藤堂藩の西島八兵衛という水利土木の異才と知り合って、設計・工事監督をした等とされています。

いずれにしても、芭蕉は江戸に出て、

職業としての俳諧点者で飯を食うほどにはまだなっていませんので、妻子を養う生活の糧を得るために、水番人になったのでしょう。

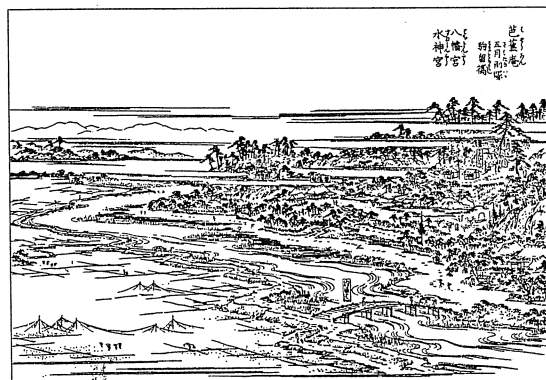
役職については、日雇い人足、帳簿方(書記)、工事監督、設計者、普請奉行などの説がありますが、「町触」からみて、町年寄配下の下役(町人)と見るべきでしょう。この当時、既に上水管理は幕府の直営管理から町年寄管理に移されていました。

水番人の仕事は、上水の監視、惣払普請、水量調節、塵芥の除去等が主な仕事で、一般的には閑職と見られています。

けだし、閑職なるが故に、専ら俳諧の道に邁進できたのだと思います。

芭蕉は、水番所から見える早稲田たんぼの光景が、江州瀬田(琵琶湖)を髣髴させると言っていました。そこで、後に宗瑞、馬公等の俳人が、ここに芭蕉真筆の短冊「五月雨に隠れぬものや瀬田の橋」を埋め墓としました。「さみだれ塚」と言い、今日も残っています。

関口大洗・水番所時代の名句は、「枯れ枝に烏のとまりたるや秋の暮れ」です。



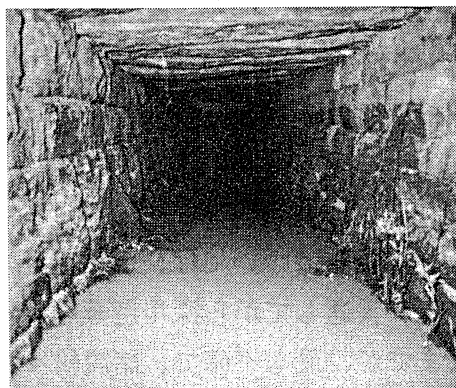
芭蕉庵 (江戸名所図会 東京都公文書館蔵)

## 江戸時代の上水

神田上水の話が出たので、ちょっとだけ江戸時代の上水に触れておきましょう。

日本で一番古い水道は、天文14年(1545)の小田原の早川上水です。これは、灌漑用水が主体で、飲料水としての上水は、天正18年(1590)に開かれた小石川上水(後の神田上水)が最も古いとされています。

その他では、甲府用水(1594)、富山水道(1605)、福井芝原用水、近江八幡水道(1607)、駿府用水(1609)、米沢御入水(1614)、赤穂水道、鳥取水道(1616)、仙台四ツ谷堰用水、大分中津水道(1620)、福山水道(1622)、佐賀水道(1623)、桑名用水(1626)、金沢辰巳用水(1632)、高松水道(1644)、玉川上水(1654)、水戸笠原水道(1663)、名古屋巾下水道(1664)、長崎倉田水道(1673)、熊本宇土轟水道(1690)、豊橋牟呂用水(1693)、郡山皿沼水道(1722)、鹿児島水道、神奈川曾屋水道(1723)等が知られています。(詳しくは、堀越正雄著「井戸と水道の話」をご覧ください)



発掘された神田上水 (昭和63年撮影)